

近藤 克則：著

研究の育て方 ゴールとプロセスの「見える化」

評者

和座 雅浩（各務原リハビリテーション病院副院長）

●これから臨床研究を志す若手研究者・臨床家の The 指南書

本書はまず「研究とは何か？」の概説から始まる。研究とは、何らかの新規性があり、今まで知られていなかったことを明らかにすること、新たな因果関係や分類を見出したり、当然と思われるでいた常識を覆したりすることとされている。研究を志す者は、研究と勉強の違いをよく理解しておかないと研究現場で仕事を続けることは到底困難との忠告とも言えるが、研究を続けることのやりがいと社会的価値とともに、それをなし得るための厳しさも伝えたいという、後進に対する思いやりとエールだと感じた。また、研究という言葉はとも曖昧に利用されており、医療機関においても混乱の原因ともなっているが、研究の分類とともに、この書籍によりよく理解することができた。

各章に掲載されているチェックリスト一覧は、研究の立案から遂行、データ収集から解析、そして論文文化に至るまでの重要事項が、各ステップにくまなくリストアップされている。それぞれの段階で、特に初心者が陥りやすい事項が網羅されており、ここまで詳細に実践的な内容が教示されている指南書を拝読できたのは初めてで、20年にわたり60人余りの大学院生を指導されてきた豊富な教育経験に基づいた、その教える手法に感服した。私自身、今後新たな研究を立ち上げるときは、本書の手順を踏みながら進めたいと思う。

客観的で論理的な思考ができるようになるためのエッセンスとして、私には特に第17章の「考察・結論の考え方・書き方」で解説されている「SWOT分析」が非常に参考になった。論文作成時に初心者が最も頭を悩ませるのは考察であるが、客観的に結果を分析し自己の研究意義と有用性を「見える

化」するには絶好の分析法であり、一読をお勧めしたい。一貫した論理で説得力のある考察ができるか否かは、研究者にとって必須の資質であることも、より理解できると思う。

各コラムには、研究におけるトピックや、臨床統計学の理解には必須でも初心者にはわかりにくい用語がわかりやすい事例で解説されていて、楽しく読める。研究に対する初心者への不安を、うまく払拭する工夫も随所に感じられた。私的には特に、「ポートフォリオ登場の背景」(p.230)のコラムが印象的であった。著者がリハビリテーション科医師として、健康長寿社会の実現のための科学的な基盤作りに尽力された「あとがき—私のポートフォリオ」(p.243)には、医師として心から敬服するとともに、いつか自身も著者のような医師ポートフォリオを描けるようになりたいと思った。第23章の「臨床と研究の両立」(p.226)は、臨床家にとっては永遠のテーマとも言えるが、この2つを両立させることのやりがいと意義が、著者自身の医師キャリアに基づいて、このセッションで力説されている。「研究のプロセスは楽しいことばかりではないが、壁を突き抜けたときの快感や達成感は、(少なくとも筆者にとって)他では得難いものである」(p.231)には、大いにエンカレッジされた。特に、将来「論文も書ける臨床家」を目指したい若手医師には、著者が伝えたいこのスピリットを学ばべきであると思う。

実は私は、著者の「研究の見える化」の教育を享受している1人であり、その恩恵に預かり、当院のリハビリテーション臨床研究の1つを、先日ある米国誌に採用してもらうことができた。著者は千葉大に赴任後も、若手研究者の臨床研究を指導する研究会を、定期的に名古屋でも開催されている。私は幸運にも、日本リハビリテーション医

学会の専門医研修会で、著者よりレクチャーを授かる機会を得たことをきっかけに、今でもこの会に紛れ込ませていただいている。私はこの会を「近藤研ミーティング」と勝手に命名したが、全国の研究機関、医療機関に属する臨床家がそれぞれの研究テーマをもち込み、著者監修の下、活発なディスカッションが行われる、まさに、研究の方向性と論理を明確にする「見える化」が行われている現場であり、毎回この会の参加を楽しみにしている。以前、この会で著者から、研究デザインの不出来やデータ収集の甘さの指摘とともに、「一般病院で臨床研究・英著論文投稿なんて、どうしてそんな大変なことをするのか？ 本当にできるのか？」と質問されたときには、自身の浅学に随分凹んだが、本書を拝読し終えた後、それくらい緻密な準備と段取りで「研究を見える化」して進めていかないと、ゴール到達は困難だと教えであったことに気がついた。門戸外の私に対しても、親身に指導して下さった著者の教育熱には、この場をお借りして心より謝意を申し上げたい。

本書のメインメッセージの1つと思われる、「よい研究は、質の高い臨床や健康長寿社会の実現のために必要で、普遍的な価値がある」(p.231)は、若手研究者・臨床家の研究マインドを大いにかき立てるフレーズであり、ここにも記載したい。本書はフィールドを問わず研究を行うことの意義と目的、そしてそれを達成するためのノウハウが懇切丁寧に記載された、まさにThe 指南書であり、1人でも多くの研究者・臨床家が本書を読まれ、実りのあるキャリアを形成されることを心から祈念する。

A5 頁272 2018年10月 医学書院刊
定価：本体2,500円＋税
[ISBN978-4-260-03674-0]

